HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	有島武郎文学の研究 ： 女性を書くこと［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	張, 輝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13694号
Issue Date	2019-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75102
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hui_Zhang_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　張　　輝

主査　教　授　中　村　三　春
審査委員　副査　准教授　水　溜　真由美
副査　教　授　瀬名波　栄　潤

学位論文題名

有島武郎文学の研究　――女性を書くこと――

・当該研究領域における本論文の研究成果

代表作『或る女』において明治期の家父長制社会から自立しようと試みる女性を描き、自らも女性解放についての論陣を張った作家・有島武郎の業績については、これまでも女性論の観点から多くの研究が行われてきた。その中で本論文は、イヴ・セジウィックの『男たちの絆』やジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』などのフェミニズム批評・ジェンダー批評・セクシュアリティ研究の理論に学び、飯田祐子・小平麻衣子・平石典子らによる日本近代文学における女性表象の種々相の研究に刺激を受けつつ、生命力の実現を願いながら自殺する少女を描いた初期作品の『お末の死』から、札幌農学校の学生寮を舞台に女性の教育と自立の問題をも取り上げた後期作品の『星座』に至るまで、『或る女』をも含む主要な七作品に対して、十章に亙って精緻かつ周到な検討を加えた。本論文はこの観点と構成の下に、有島の小説における表象としての女性と、それとの関わりにおける男性造形をも集中的に論じたことにより、女性を書くことに関する作品分析中心のものとしては初めての本格的研究と言うことができる。

具体的な研究成果として、（１）セジウィックの示唆による男たちの絆（ホモソーシャルな関係）を各作品の基盤に認め、その観点から小説の人物造形や物語を克明に分析し、（２）男性中心主義的な国家・社会・家族の制度が人物造形や人物間の関係におけるジェンダー的な構図にどのように浸透しているかを考察し、（３）人物のセクシュアリティにも着目して、それらの観点と小説の物語構造や語りの問題との交錯点において、各作品の解釈を根底的に更新したことが挙げられる。このような論点により、「お末の死」「クララの出家」『宣言』「石にひしがれた雑草」などの解釈は全く新たな次元に高められた。また、（４）小説で描かれた男女関係を単純に恋愛や性などの枠組みに回収するのではなく、最も西洋的な作家と言われた有島における西洋と日本との関係の表象とも見なし、特に物語において西洋思想からの脱却の方向性を認め、女性表象と併せ有島文芸の展開におけるもう一つの基軸として前景化したことも見逃せない。この論点により、特に『或る女』『迷路』『星座』などに対して独自の評価を加える結果となった。

総じて本論文は、有島文芸における女性を書くこと、および書かれた女性の問題について、これまでになく理論的に高度で着想として新規な研究成果を挙げた論文として認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、有島の発表したすべての長編小説である『宣言』『迷路』『或る女』『星座』と、重要な短編である「お末の死」「クララの出家」「石にひしがれた雑草」を重点的に取り上げ、フェミニズ

ム・ジェンダー・セクシュアリティを主な着眼点として克明に分析した。その結果として有島の創作史を、自らの内部にあった〈聖女〉と〈娼婦〉という類型的な女性観や、美少女憧憬、あるいは教育によって女性が解放されるとする女性啓蒙などの思想を徐々に相対化し、ひいては自らの立脚点であった西洋崇拝に対しても批判を行うことによって、自らの限界を乗り越えようとする営為の過程として理解した。これらの論旨は有島文芸の研究において極めて独自なものであり、その点において本審査委員会は本論文を高い水準にある研究として評価した。

ただし、審査の過程において幾つかの疑問点も指摘された。すなわち、（１）個々の作品論に重点を置くあまり、有島武郎という作家における女性を書くことの独自性や問題点をより十分に明らかにするに至っていないこと、（２）本論文に基盤を与えているはずのセジウィックの理論に関して、具体的な分析や敷衍が行われておらず、特にホモソーシャルの問題についてホモフォビア（同性愛嫌悪）の観点が乏しいこと、（３）フェミニズム批評・ジェンダー批評・セクシュアリティ研究の理論的な枠組みを前提とし、その枠組みをやや図式的に当てはめることで作品解釈の方向性に偏りが認められ、多様な小説技法の局面がおろそかになる傾向があることなどである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の斬新な研究態度と表裏をなす問題であり、それによって本論文全体の達成度を損なうものではない。それらは申請者が今後も引き続き有島文芸に関する研究を継続し、さらに分析・解釈と評価の方法と技量を洗練することによって、十分に解決できる課題であると考えられる。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。